

アイヌ文化の新たな発展



幕別町蝦夷文化考古館は、吉田菊太郎さんが先祖の残した民具や宝物を保存しようと、昭和34年(1959)につくり上げた資料館。(151ページ)

こうして伝統的なアイヌ文化は、北海道の「日本化」が進む中で否定され、和人のバカげた差別もあって危機をむかえました。

しかし、そんな中でもアイヌ民族の生活を守り、伝統的な文化を残していこうという人々が、努力を続け、手をにぎりあっていきました。

団結・教育・禁酒を説く、農産物の保存を広める、塾や学校を作る、「保護法」の改正を政府などにうたえる、ウポポ(歌)やリムセ(おどり)、ムツクル、トゥイタク(昔話)を伝える、アイヌ文化財を集めて保存し復元する、伝統的な生活や祭り・カムイノミなどの儀式を続ける、アイヌ民族の現状を広くうたえる、伝説や地名を研究する、団体をつくる、政治家になる、などいろいろな角度から、アイヌ文化が守られてきました。(p149)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



十勝にとどまらず、全国各地でアイヌ文化を表現し続ける「帯広カムイウポポ保存会」。「2005イオルフォーラム」での公演。

アイヌ文化振興法

平成9年(1997)、問題の多かった「保護法」にかわって、「アイヌ文化振興法」が制定されました。

これは、「アイヌ文化をさかんにし」「伝統などに関する知識を広め」「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会を実現しよう」とする法律です。

自分が慣れた文化だけを「十勝の文化」「日本の文化」とするのではなく、アイヌ文化も和人の文化も、さまざまな地方文化、新しい文化、古い文化も(さらには移住してきた外国の人の文化をも)尊重し、育てていくことが、豊かな暮らしをつくっていくことになるのではないのでしょうか。

「イオル」の再生

「イオル」とは、もともと、コタン(集落)を中心とした、魚とりや狩り、植物採集をおこなうための地域のことをいいます。

そうしたアイヌ民族の生活を支えてきた自然環境に加えて、伝統的な儀式や伝説など心の文化もふくめた「伝統的な暮らしの場」を守り、伝え、育てていくことを「イオルの再生」と呼んでいます。

このイオル再生のために、白老町を中心として、平取町・新ひだか町・札幌市・旭川市・釧路市、それに十勝が「地域イオル」として選ばれました。



上士幌町・東泉園では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、儀式、漁、工芸、アイヌ植物園など、さまざまな面からアイヌ文化を守っている。

1 アイヌ文化振興法(アイヌぶんかしんこうほう): 正式には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓蒙に関する法律」。

使われてきたさまざまな民具... 幕別町蝦夷文化考古館

幕別町蝦夷文化考古館は、吉田菊太郎（アイヌ名アリトムテ：1896～1965）さんが、晩年、アイヌ民族の伝統的な道具や着物が身近なところから消えていくのを悲しみ、先祖が残した民具や宝物を保存しようと、つくった資料館です。昭和34年（1959）のことでした。

菊太郎さんは、チロツトコタン（幕別町）のリーダーであり、十勝の、そして北海道のアイヌ民族の指導者でもありました。

幕別町蝦夷文化考古館では、アイヌの人たちが実際に使っていた、うるしぬりのシントコやイタンキなどの器、チタルペ（ゴザ）、刀、弓矢、マレク、チブ（丸木舟）、衣服... といったさまざまな生活用品や宝物、それに写真などを見ることができます。

昭和40年（1965）に菊太郎さんが亡くなると、遺族の方が建物と収藏品すべてを幕別町に寄付しました。

そのほか、各市町村の博物館などでも、アイヌ文化に関する展示を見ることができます。

帯広百年記念館には、アイヌ民族文化情報センター「リウカ」があり、本やビデオなどに記録された映像、音、あるいは遊びなどを通して、アイヌ文化にふれることができます。



アイヌ民族文化情報センター「リウカ」（帯広百年記念館）。リウカとは「橋」の意味。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の位置。幕別町字千住

十勝のアイヌ民族に関する口承と記録... 語り伝えと文字

かつての伝統的なアイヌ社会では、語り（口承）によって歴史が伝えられ、文字による記録は残されていません。伝わるうちに、少しずつ変わることもあるでしょう。

一方、当時のできごとについて文字で記録されたものは、和人が外国人のものになります。どんな観察者でも、自分の社会の見方にしばられ、また、自分（たち）に都合よく記録することがあるので、記録を見る時には注意が必要です（現代の本、教科書やこの本でもそうです）。

ソバウスとその子中村要吉（イベツカレ）など、アイヌの人の語り伝えによると、およそ400年くらい前、十勝内陸部には、古くからの一族（村長：チパイコロ）が帯広に、北見系の一族（村長：シャガニ）が音更に、そして石狩系の一族（村長：モザルク）が札内にいたとい

ます。（『帯広市史 平成15年編』より）

文字による、十勝のアイヌ民族についての最も古い記録は、オランダの探検家フリースの『日本北東航海旅行記』にあります。

1643年、オランダ東インド会社のフリースが指揮する船カストリクム号は、日本周辺の金・銀を調査中でした。

フリースたちは十勝沖で停泊中、少年1人をつれたアイヌの男性2人の舟に出会いました。

記録によると、「彼らは北西を指し、自分たちはそこに住み、そしてそこはタカブチと」と教えてくれます。また、「彼らはあらい麻布を着、その上の衣服は毛皮製であった」と記されています。（『1643年 アイヌ社会探訪記（北構保男）』より）

2 帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館
3 リウカ：アイヌ語で「橋」の意味。

4 文字（もじ）：文字は、支配者が生まれることによって必要とされるといわれている。現在、日本には文字によるさまざまな文化が生まれているが、もともと日本には独自の文字はなく、基本的に中国の漢字を輸入して利用した。かなも、もとは漢字である。